

紀州雀の稗  
(キシウスズメノヒエ)

須藤 健一

イネ科スズメノヒエ属の多年草。半抽水性で匍匐し、北陸から関東以西の水田などの日当たりの良い湿地に生育する。湖沼やため池、水路などでは、時に浮遊マットのように水面を覆うことがある。帰化植物で1924年に和歌山県で確認されたのでこの名があるが、戦後になって各地で増加した。また、1970年から始まったコメの生産調整で、湛水田でも栽培できる本種が、水田地帯の畜産農家で暖地型牧草として利用が検討されたこともあった。

ほとんどは越冬した根茎で繁殖するが、発芽率は低いものの種子からの繁殖もある。種子あるいは根茎から出芽・萌芽した個体は匍匐茎を伸ばしながら各節から分枝し、四方へと広がって大きな群落を作る。背丈は20～50cm、節には普通、毛があるが、葉身、葉鞘には毛がない。

7月頃から出穂・開花が始まる。稲株の間では立ち上がって稲と同じくらいの高さになるが、あまり高くはならない。出穂するまでは他草種と見分けにくい、出穂するとキシウスズメノヒエの花序はV字型の2股(まれに3, 4個)に分かれ、簡単に見分けがつく。種子の念実率は低い。

同属で、キシウスズメノヒエより大型で節や葉身に毛を密生するチクゴスズメノヒエがある。以前は、6倍体の基準変種キシウスズメノヒエと4倍体の変種チクゴスズメノヒエに分類していたが最近ではどちらも変種とされる。キシウスズメノヒエよりチクゴスズメノヒエの方が、匍匐茎からの発根は容易で、水田、湖沼、水路などでの被害は大きく、国の重点対策外来種に指定されている。

防除に際しては、水田では匍匐茎が畦畔から侵入することが多く、草刈りなどで畦畔を丁寧に管理することが重要である。前年に発生し耕起されて散らばった切断茎から発生してくることもあるが、代掻きを丁寧に行い土中に埋設させることで萌芽を抑制できる。水田の中で発生した個体や畦畔から水稲の間に侵入してきた個体には、シハロホップブチルやメタミホップの液剤をキシウスズメノヒエの株元まで薬液が十分に付着するように散布することで枯死させることができる。早期栽培では

水稲収穫後の繁茂が問題になるが、刈り跡に繁茂してきた個体には非選択性除草剤を散布することで、翌年の発生を抑制できる。チクゴスズメノヒエも同様に防除できる。

もう30年以上前になるが、県の試験場で日本植物調節剤研究協会からの受託試験を行っていた。手元に資料がないのではっきりしたことは分からないが、その受託試験で、確か1993年か94年だったかと思うが、ノビエを対象とした薬剤としてDEH-112EWを受託した。たぶんノビエの5葉期か6葉期に対する効果の確認だったかと思うが、ノビエにしか効果がないということで初期に発生する広葉草種をベンタゾンで抑えた処理だったように思う。移植後30日目頃に薬剤を処理したがノビエに対する効果は十分であった。

残草量の調査時点で、DEH-112EW処理区でのノビエに対する効果は十分で水稲以外のイネ科草種はほとんど見られなかった。一方、無処理区では、ベンタゾンの効果により広葉草種はほとんど見られなかったが、あるイネ科草種が水稲を覆うほどに繁茂していた。それが除草剤試験圃場の全面に渡って発生していたキシウスズメノヒエであり、シハロホップブチルのキシウスズメノヒエに対しての抑草効果の発見であった。



*Paspalum distichum* var. *distichum*  
K. Sudo July 13 '25